

知的な障がいを持つ人たちの森林活動 - 言葉の少ない人たちへの配慮 -

佐藤孝弘・青柳かつら

はじめに

私たちは2004年度から知的障がいを持つ人たちの施設(以下、施設と呼びます)の協力を得て、施設を利用している知的障がいを持つ人たち(以下、利用者と呼びます)のための森を楽しむ活動(以下、活動と呼びます)の実施とその中でコミュニケーションの分析から、利用者の森林活用プログラムの開発に取り組んでいます。

今回は、研究初年度である昨年度の調査から、言葉を発することが少ない人たちのコミュニケーションについて考えます。

なぜ、コミュニケーションを分析するのか？

1 コミュニケーション分析の意義

最近、私たちのところに「知的障がいを持つ人たちを対象に活動を行いたい、どんなふうになればいいのかイメージがつかめない。」あるいは「知的障がいを持つ人たちとの活動はどんな雰囲気なのか教えてほしい。」といった問い合わせが来るようになってきました。私たち森林林業関係者は、こうした人たちと接する機会がほとんどないため、活動を行うとなると、なかなかイメージがつかめないものです。

活動を楽しく、有意義なものにするには、参加する人たちと案内する人たちのコミュニケーションがとても重要です。このため、活動の実態を把握するには、活動中のコミュニケーションの様子を分析検討することが効果的と考えられ、必要な配慮事項を考えたり、利用者への理解を深めることにも役立つと思われま。

2 コミュニケーションとは？

コミュニケーションとは、人(送り手)から人(受け手)への情報の伝達やそれにより生じた心のふれあい、共通理解などを意味します。また、情報を伝える手段としては言葉が用いられる場合と身ぶり手振りなどの言葉によらない方法の2つがあり、前者を「言語的コミュニケーション」、後者を「非言語的コミュニケーション」といいます。

特に、言葉によるコミュニケーション能力は、私たちが社会生活を送るためにとても重要で、その発達には、発声・発音、感覚・身体運動機能などの能力が適切に発達することとともに、暖かい人間関係、日常生活や遊びでの言葉の経験、自然や社会の物や現象についての豊かな経験といった、環境要因の双方が重要であるとされています。

一般に、知的障がいを持つ人たちは言葉の発達が遅く、ほかの人たちとのコミュニケーションが難しいことが多いとされています。特に、言葉は理解しているが、言葉を発する能力の遅れがみられることが特徴で、私たちが俗に言う「性格的に無口で口数が少ない」とか「口下手で話せない」といった状況とは問題の質が異なります。

研究に協力を頂いている施設

研究に協力を頂いている施設は、利用者20名、職員9名(2003年度)で運営されている通所授産施設です。通所授産施設は、利用者が自宅からここに通り、自立に必要な訓練を受けたり、実際に仕事をし

て経済的自立を目指しています。利用者は18歳以上の人たちで、木工品や織物などを作るほか、芸術活動や地域の人たちとの交流などにも取り組んでいます。障がいの程度は大多数の人たちは軽い状態といえますが、自閉的傾向^(注1)のある人や、知的障がいのほかに、視覚や聴覚などの身体上の障がいをおわせもつ人もいます。

施設は約20haの森林を所有し、利用者と職員と一緒に森林を散策する活動を行っています。施設側はこの森林を利用者だけではなく、将来的には、多くの人々が訪れる場所として活用していきたいと考えています。

調査・分析の進め方

1 分析対象とした活動

分析対象としたのは、2003年の4月から5月に実施した森林散策活動3事例です。各活動とも、施設が所有する森林に設けられた散策路を、施設職員と利用者が一緒に歩く内容です。また、この活動に参加した利用者は延べ人数で16名、実数では7名で、所要時間は各活動ともに1時間程度でした。

2 分析方法

コミュニケーションの分析には、活動の様子を記録した映像と音声が必要となるため、私たちは、施設側から森林散策の様子を記録したビデオを提供して頂き、映像と音声を収集しました。

分析は、次のように進めました(図-1)。最初に、映像から利用者や職員の行動や会話を書き出します。また同時に情報

の送り手〔S〕と受け手〔R〕を判別します。この時の「S R」の一对をダイアド(D)と呼びます。次に、表-1に示すカテゴリーに、ダイアドを構成する〔S〕や〔R〕の言葉や行動を照らし合わせて種類分けを行い、さらに、用いられたコミュニケーションの手段を調べるため、ダイアドの〔S〕と〔R〕の組み合わせを「言語 言語」「言語 非言語」「非言語 言語」「非言語 非言語」に分類し、集計を行いました。

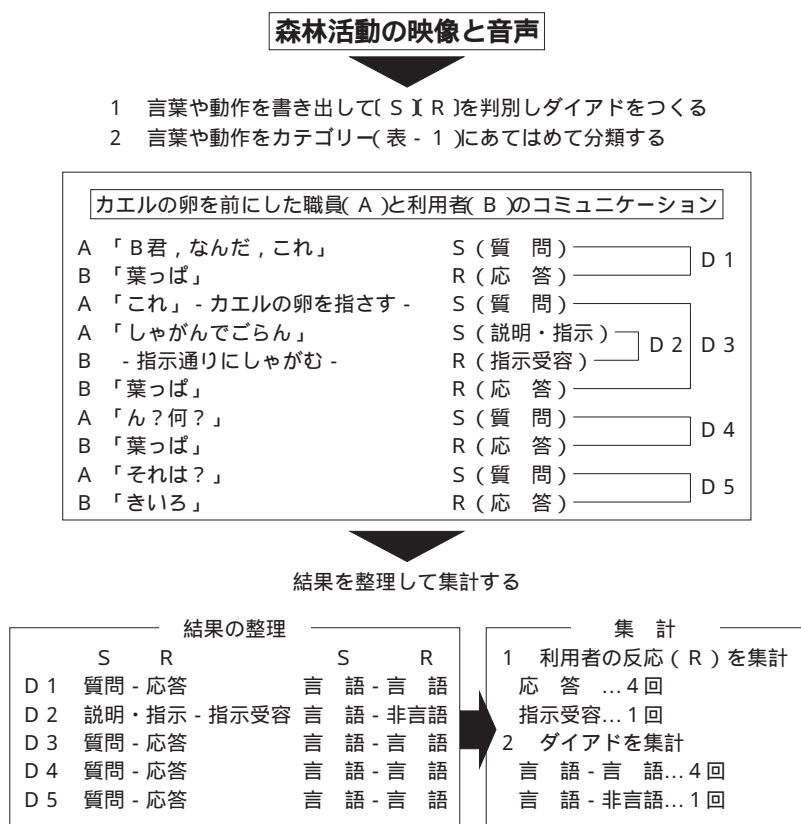


図-1 分析の進め方

表 - 1 分類に用いたカテゴリー

送り手の手段 (S)	言語的なもの	説明・指示・勧誘・要求 問いかけ 意見 肯定的評価 否定的評価 緊張緩和 問返し	活動の進行に必要な言葉 参加者への 閉じたもの・開いたものの双方を含む 活動に関連した考え・感想を述べる はげまし・よくやったねなど行動を強化する言葉 誤りの指摘・ちがうよそれ 笑い・冗談など活動に関連しない言葉 相手が発した言葉を繰り返す	
	非言語的なもの	説明・指示・勧誘・要求 誘導 介助・支援 その他の情報や刺激	活動の進行に必要な動作(言語がない) 指差・体にふれて誘導等 障害による問題を指導者が助ける行動 カメラが向く,何か音が聞こえる,物事を見つける,思いつくなど	
	受け手の手段 (R)	言語的なもの	意見・考え・感想 応答 質問する 単語による質問 問返し 単純反応 同意・不同意 緊張緩和	~だと思ふ・~だね(センテンスを構成) 考えを単数・複数の単語で応答する ~ですか(センテンスを構成 活動への関連の有無を問わない) 質問を単数・複数の単語で行う 相手が発した言葉の繰り返し うん, はい, ふーん, 相手に同意・不同意の意思を伝える言葉 笑い・冗談など活動に関係しない言葉
		非言語的なもの	傾聴 作業 単純反応(行動のみ) 指示受容 自発行動 無反応 滞留 その他の行動	説明を聞く姿勢 与えられた作業や課題を行う うなずく, 首を横に振るなど単純な動作で意思を伝える 指示や誘導に従う行動(言語なし) Sに対してとられた自発的な行動(言語なし) Sに反応がない場合 立ち止まり・傍観・待機 上記にあてはまらないもの

森林散策の様子

結果について述べる前に, 利用者が森林散策の中でどんなコミュニケーションをしていたか具体的に示します。取り上げるのは, 2003年5月に実施した森林散策で, 参加者は利用者7名, 職員3名に筆者が加わった合計11名でした。

その中の一場面を図-2に示します。利用者2名, 職員2名と筆者の5名がホオノキを前にコミュニケーションを行っています。職員のS1さんが散策路脇にホオノキを見つけ, Aさんに名前をたずねることから始まり, この木はホオノキであること, 良いにおいがすること, 大きな葉が特徴であることなどが話し合われています。

利用者のうち, Bさんは筆者とホオノキについて会話をしていますが, その中で「においするわ(D5)や「まだまだ大きくなるの?(D7)のように, 自分の考えを述べたり, 疑問に思ったことを質問する場面がみられます。これに対してAさんは「葉っぱ(D2)」で, か(D10)などのように, 発せられる言葉が単語レベルに止まり, S1さんと一緒に唱えながら, ホオノキという名前を確かめるなど, 言葉を発することが少ない様子です。ただし, Aさんは, S1さんの呼びかけに木の方を振り返る(D1)やS1さんが指さす動きに, 自らも指さす動作をする(D2)などといったことから, 周囲の人の言葉や行動の意味や内容は理解していると推測されます。

森林散策時の利用者，職員，筆者によるコミュニケーション (2003.05.29)

ホオノキを前にした5人のコミュニケーション
(利用者A, B〔共に男性〕, 職員S1〔女性〕, S2〔男性〕, 筆者)

- 散策路を歩いてきた一同，ホオノキの前で立ち止まり話し始める -

<p>S1 「A君，この木，なーんだ？」</p> <p>A - 木の方を振り返る -</p> <p>S1 - ホオノキを指さす -</p> <p>A 「葉っぱ。」 - ホオノキを指さす -</p> <p>S2 「S1さん，何ですか？これ。」</p> <p>S1 「わかりませーん」</p> <p>S2 「ホオね，ホオノキ」</p> <p>S1 「へー，ホオノキっていうんだー」</p> <p>筆者 「におい，します？」 - Bに葉を渡す -</p> <p>B 「においするわ」 - においをかきながら -</p> <p>筆者 「こんなでっかい葉っぱになります」</p> <p>B 「へー」</p> <p>B 「まだまだ，大きくなるの？」</p> <p>筆者 「なりますよ」</p> <p>S1 「これぐらいしか，葉っぱはつかないんですか？」</p> <p>筆者 「でっかい葉っぱを少なく，並べてつけてます」</p> <p>S1 「A君はでっかく生きたんだね」 - Aの肩をたたく -</p> <p>A - 肩をたたかれ，S1の方を見る -</p> <p>S1 「でっかいねー」 - Aと手をつなぎながら -</p> <p>A 「で，か」</p> <p>S1 「ホ，オ，ノ，キ」</p> <p>A 「ギー」</p> <p>S2 「そう，ホオノキね」</p> <p>S1 「ホウキじゃないんだよー」</p> <p>S1 「ホー，ノ，キ」</p> <p>A 「ホー，ノ，キ」</p>	<p>(説明・指示) _____ D1</p> <p>(単純反応：動作のみ) _____</p> <p>(説明・指示) _____ D2</p> <p>(応答) _____</p> <p>(質問) _____ D3</p> <p>(応答) _____</p> <p>(説明・指示) _____ D4</p> <p>(意見) _____</p> <p>(説明・指示) _____ D5</p> <p>(意見) _____</p> <p>(説明・指示) _____ D6</p> <p>(応答) _____</p> <p>(質問) _____ D7</p> <p>(説明・指示) _____</p> <p>(質問) _____ D8</p> <p>(説明・指示) _____</p> <p>(緊張緩和) _____ D9</p> <p>(単純反応：動作のみ) _____</p> <p>(意見) _____ D10</p> <p>(応答) _____</p> <p>(説明・指示) _____ D11</p> <p>(応答) _____</p> <p>(意見) _____ D12</p> <p>(意見) _____</p> <p>(説明・指示) _____ D13</p> <p>(応答) _____</p>
--	---

- 一同，再び歩き出す -

図 - 2 森林散策時のコミュニケーションの例

言葉の多い人たちと少ない人たち

施設の利用者の多くは，Bさんをはじめとして，言葉によるコミュニケーションを普通に行える人たちです。一方，Aさんのように言葉を発することが少ない人たちもみられます。

私たちは，施設職員からの情報収集やふだんの生活や活動時の様子，活動時に使われる言葉の語彙や種類などから，7名の利用者を，言葉の多い人たち（3名）と言葉の少ない人たち（4名）に分け，コミュニケーションの様子を比較しました。

以下，結果を述べます。

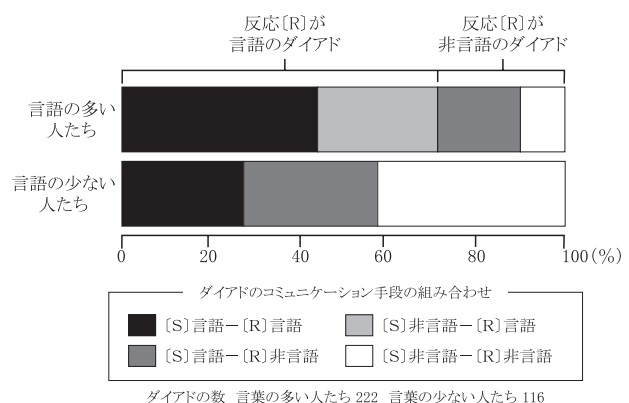


図 - 3 コミュニケーション手段の組み合わせの比率

1 コミュニケーション手段の違い

得られたダイアドの〔S〕と〔R〕の組み合わせを図-3に示します。

各組み合わせの比率をみると、言葉の多い人たちでは、「言語 言語」が45.5%、「非言語 言語」が27.0%、「言語 非言語」が18.0%、「非言語 非言語」が9.5%でした。これに対し言葉の少ない人たちでは「言語 言語」が28.4%、「非言語 言語」が0.9%、「言語 非言語」が29.3%、「非言語 非言語」が41.4%となり、反応〔R〕の部分が言語であるダイアドの比率は、言葉の多い人たちでは72.5%であったのに対し、これが少ない人たちでは29.3%と低い状態でした。

2 コミュニケーションの内容

ダイアドの中で利用者がコミュニケーションの主体となる〔R〕の部分に着目し、これを表1に示したカテゴリーにあてはめて集計した結果を図-4に示します。

これによると、言葉の多い人たちは、自分の意見や考えを述べること(28.8%)、単純反応で応じる(12.2%)、応答・緊張緩和・質問する(各9.5%)の頻度が高く、職員や筆者からの働きかけ〔S〕に対し、言葉を用いてコミュニケーションを行う場面が多い結果でした。

これに対し、言葉の少ない人たちは、応答(26.7%)、自発行動(24.1%)、指示受容・その他の行動(12.9%)の頻度が高く、全体としては、働きかけに対し非言語的手段を用いることが多い状況でした。特に、用いる言葉としては、「応答」の頻度が高く、指導者の働きかけなどに対し、単数もしくは数個の単語を用いている様子が伺えました。

3 言葉を引き出すには？

それでは、森林活動において、情報の送り手となる案内人は、言葉の少ない人たちにどのように接することが望ましいのでしょうか？ここでは、その有効性の議論は別として、言葉の少ない人たちから言葉を引き出すという観点から検討してみました。

結果を表-2、3に示します。これらは情報の送り手〔S〕の用いたコミュニケーション手段を言語的なものと非言語的なものに分け、それぞれに対する受け手(利用者)の反応〔R〕を集計したもので、表-2が言葉の多い人たち、表-3が言葉の少ない人たちの結果を示しています。

これによると、言葉の多い人たちでは、送り

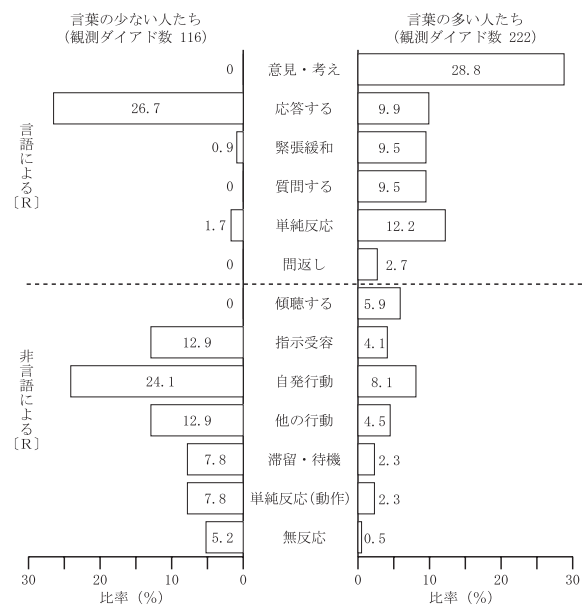


図-4 森林散策3事例で見出されたダイアドの〔R〕のうちわけ

表-2 送り手〔S〕のコミュニケーション手段の違いによる受け手(利用者)の反応〔R〕の頻度(言葉の多い人たちの場合 ダイアドの総数 222)

	反応〔R〕が言語であったダイアド	反応〔R〕が非言語であったダイアド
情報〔S〕が言語	101	40
情報〔S〕が非言語	60	21

独立性の検定 有意差なし

表-3 送り手〔S〕のコミュニケーション手段の違いによる受け手(利用者)の反応〔R〕の頻度(言葉の少ない人たちの場合 ダイアドの総数 116)

	反応〔R〕が言語であったダイアド	反応〔R〕が非言語であったダイアド
情報〔S〕が言語	33	34
情報〔S〕が非言語	1	48

p<0.01 (直接確率計算 両側検定)

手からの情報〔S〕が言語であった場合と非言語であった場合との間で、生じた反応〔R〕の頻度（言語と非言語）に統計的な有意差は認められませんでした。一方、言葉の少ない人たちでは、発信〔S〕が言語であった場合の方が、言語（単語レベル）での反応〔R〕のダイアドの数が多い結果となり、統計的にも有意差が認められました。即ち、言葉の多い人たちは、情報の送り手がどのような手段で働きかけを行っても、自らの判断で、言語や非言語を選択して反応を行っているのに対し、言葉の少ない人たちとコミュニケーションを図るためには、情報の送り手側（案内者等）は、言葉を用いて働きかけを行うことが必要であると推測されます。

4 結果をまとめると？

以上の結果から、次のことが推測されます。

今回対象とした活動に参加していた利用者の中には、言葉の多い人たちと少ない人たちがいました。このうち、言葉の多い人たちは、自らの意見を述べたり、質問をしたり、緊張緩和（笑いや冗談など）といった言語的手段を用いてコミュニケーションを行っていたと考えられ、こうした人たちの存在により、全体的な雰囲気は活気のある森林散策であったと考えられます。一方で、言葉を発することが少ない人たちは、言葉よりも非言語的手段によるコミュニケーションが主体で、言葉を発したとしてもそれは単語もしくは複数の単語レベルに止まっていました。ただし、こうした人たちは周囲の人たちの言葉や行動を理解できないのではなく、周囲の人たちが言葉を用いて話しかけることにより、言葉を介したコミュニケーションが成立する可能性が高いと考えられます。

おわりに

活動の中で利用者の皆さんは、森林に関する事柄だけではなく、自分たちのふだんのくらしのことや楽しみにしていることなど、色々なことを私たちに話してくれます。また、私たちも、多くの利用者に積極的に話しかけるよう心がけています。

健常の人たちの森林散策では、一般的に、森林の動植物や機能といった「森林に関する知識」が話題の中心です。しかし、知的障がいを持つ人たちの活動では、そうした「知識」の伝達ではなく、開放的雰囲気の中で楽しく過ごしたり、ストレスを発散したりといった「心の健康」を得ることの方がより重要な意味を持つと考えられます。こうした目的の達成に、コミュニケーションはとても重要な役割を果たすものと思われれます。

私たち森林林業関係者が障がいを持つ人たちと活動をする場合には、全員一緒に楽しい雰囲気の中で森林に出かけることを念頭に、参加している人たちに積極的に言葉をかけ、コミュニケーションを図ることが重要と考えます。

今回の報告は研究初年度の限られた取り組みに基づくものであり、調査方法の改善も含め、より多くの事例分析が必要と考えます。また、知的障がいといってもその状況は一人ひとり異なることが予想されます。こうした点に配慮し、今後の調査を進めていきたいと考えています。

（保健機能科）

注1 自閉症

自閉症は生後早期に現れる行動の障がいです。他の人との関係づくりが困難であったり、言葉の発達が遅かったり、興味関心の狭さや特定事物へのこだわりなどを特徴とします。自閉症の人たちは、こうした特徴をあらわすことで心の安定を保っていますが、過剰な刺激、情報が多すぎて処理できない状況、意思にそぐわないことなどがおこるとストレスを感じ、これを発散させようとする行動が、パニックとしてあらわれることがあります。また、こうした事態の回避には、周囲の人たちと当人との普段からのコミュニケーションが重要であるとされています。